

北野天神縁起における 尊意の説話について

田 中 徳 定

はじめに

『北野天神縁起絵巻』を繕いていくと、筑紫の地において怨みを抱いて没した菅原道真が、程経ずして比叡山第十三座主尊意の許へ化来する場面がある。

法性房尊意の住房に束帯姿で現れた道真は、これより怨みを報ぜんがために京に入ることを告げ、ついでには、尊意の験力が強いので、たとえ勅命を蒙ろうとも調伏の祈禱は行わないでもらいたい旨を頼むのである。尊意がその意を受け入れぬと知るや道真は色をなし、そこに供されていた柘榴を口に咄んで妻戸へ吐きかける。妻戸はたちまち炎と然え上り、尊意は灑水印を結んでたちどころに消し止めてしまう。

所謂柘榴天神と称される話である。

絵巻はその後、朝廷からの再三の召に応じた尊意が、鴨川の洪水を験力によって押し開き、宮中に向かって牛車を疾駆させる場面へ

と展開していく。

ところで、この柘榴天神の話とそれに続く尊意参内の挿話は、尊意の験力が語られるという点において、北野天神の縁起を語るといふ、縁起本来の性格とそぐわない感を与える部分であるため、従来夾雑物的に看做されるのが普通であつた。⁽¹⁾

しかし、近年、南里みち子氏が、菅公怨霊譚の冒頭に置かれていゝる尊意霊験説話は、縁起の中において重要な意味を持っているのではないかと提言され、尊意が、菅公怨霊譚形成に大きく関与していただろうと考えられる藤原忠平と密接な関わりを持っていたことから、忠平によって、菅公の怨霊を鎮め得る人物として尊意が選ばれていったのではないかと考察されている。⁽²⁾

さて、そこで問題となるのは、確かに尊意と忠平は密接な関わりを持っていたが、尊意が菅公の怨霊を鎮め得る人物と考えられた根拠は那辺にあったか、ということである。南里氏は、尊意と菅公の話が縁起以前の文献に見えぬところから、柘榴天神の話の成立について、笠井昌昭氏の説⁽³⁾に従い、絵巻制作のごく近い以前に創作され

たものであらうと考えておられる。しかし、唐突にこのような話が生じたのではあるまい。尊意が菅公霊を鎮め得る人物として選び取られていったことには、やはりそれなりの尊意と菅公霊にまつわる、何らかの伝承があったのではなかったか。それが縁起の柘榴天神の話が創作されていく下地となっていたのではなかったらうか。

例えば、縁起における浄蔵の時平加持の場面。青竜と現じた菅公が、浄蔵の父三善清行に浄蔵の加持を止めるよう要請し、清行が浄蔵を退出させると忽ち時平は息を引き取る。この話は『扶桑略記』所引『浄蔵伝』に見えるところから、縁起は、それまでに存在していた伝承によってこの場面を描いたことが知られる。そうすると、尊意の話に関しても、何らかの下敷となる伝承が存在したと考えられるのではないか。

以前、『平家物語』の中において、比叡山宣揚の成句として、「恵亮摧腦」という成句とともに用いられたとされている「尊意振剣」という成句の背景を考えた際、この成句は、延長八年六月二十六日の清涼殿への落雷によって重体に陥った醍醐天皇を、不動法加持によって安穩たらしめた尊意の験力を象徴的にいったものであり、『北野天神縁起』にみえる柘榴天神の話は、この尊意による醍醐天皇加持の伝承を改変して創作されたものではなかったかと想像してみた。⁽⁴⁾

そこで本稿においては、叡山における尊意に関する伝承を探ることによって、尊意の醍醐天皇加持の事実が柘榴天神の話の下敷となり得るかどうかが考えてみたい。それとともに、尊意と忠平との関わりが、どのような形で『北野天神縁起』にまで反映していったのか

も併せて考えてみようと思う。

一、尊意の将門調伏譚をめぐる問題

『平家物語』巻八「名虎」の中にみえる「尊意振剣」という成句の背景としては、二つの伝承があった。尊意が菅原道真の怨霊を鎮慰したとするものと将門を調伏したとするものである。⁽⁵⁾そして、どうやらこの二つの伝承は、それぞれ異なった伝承圏を持っていたものらしい。そこで、叡山を中心にみていった場合、叡山における尊意評価とこの二つの伝承はどのように関わり得るのか考えてみようと思う。

『尊意贈僧正伝』を見ると、尊意の験力を語る中心には、醍醐天皇加持が置かれており、尊意が将門を調伏したことは触れられていない。また、『扶桑略記』においては、清涼殿に落雷のあった延長八年六月二十六日条に、『尊意贈僧正伝』より尊意の醍醐天皇加持の記事を引くのに対して、天慶三年正月から二月にかけての将門調伏関係の記事の中には、調伏に関わった僧として尊意の名を見出すことはできない。

尊意が実際に将門調伏に携ったかどうか明確な記録はないが、『貞信公記』⁽⁶⁾天慶三年正月二十二日条に、

泰舜・泰幽太元、明達四王、向美濃、静因六足天王寺、定玄不

動相応寺、各二七日、

とあり、また二十四日条に、

内御修法於山座主所令始行之、十五人、以明達補十禅師、縁遣

美濃也、

とある。二十二日の記事によれば、泰舜・泰幽が太元法を行なったこと（『覚禅抄』五「明王部・太元法下」に泰幽・泰舜・圓照が宣旨によって兵革を消除すべく修法を行なった際の支度が、天慶三年正月二十一日の日付を伴って掲載されており、この記事と符合する）、明達が四天王法を行なったこと（『扶桑略記』正月二十四日条に「有勅、遣延曆寺阿闍梨明達於美濃国中山南神宮寺、令修調伏四天王法、擢授内供奉十禅師、于時、焼香之煙、遍滿寺中、助修僧侶州人。各掩其鼻、将門被誅之日、臭香滿、結願之時、賊主将門其首到来」とあり、『貞信公記』二十四日条の十禅師に補された記事とも符合する）が知られる。また、以下については資料によって確かめなかったが、おそらく静因が天王寺で大威徳法を行なったこと、定玄が相応寺で不動法を行なったことをいっていると思われ、それらはいずれも将門調伏のための修法であったとみてよいだろう。

そうすると、そのような最中に行われた内御修法も、当然将門調伏に関わるものであったと考えるのが妥当だろう。尊意が将門調伏に関与していたことは、ほぼ間違いないとみてもよからう。

さて、そこで問題となってくるのは、尊意が将門調伏に関わっていたということが、後世叡山において、ほとんど忘れ去られてしまっていた、ということである。

『阿婆縛抄』卷七十五「四天王合行・先縦等」には、

功德院實圓阿闍梨記云。雖大原天慶中将年門乱逆之（時）法性

房蒙宣旨被修此法。云々。此言不_レ然。勸_レ彼伝_レ不見_レ此

旨。又不_レ見_レ天慶記。更勸。（云々）

とあって、おそらく、「實圓阿闍梨記」には天慶年中の将門乱逆の時に尊意が宣旨を蒙り、四天王法と行なったことが記されていたものと考えられる。しかし、『阿婆縛抄』の編者承澄は、この記事を載せつつも、『尊意贈僧正伝』『天慶記』『天慶記』についてはどのような書物であるか確かめなかった（見えなことをあげて、不審の念を表わすのである。この實圓とは、大治五年（一一三〇）天台講師になった實圓かと思われるが、承澄の時代には、叡山において、尊意の将門調伏はまったく忘れ去られてしまっていたようである）。

このように、尊意による将門調伏が忘れ去られていく背景には、叡山における将門調伏の立役者は、明達であり、浄蔵であった、という事情が関わっていたためであろうと思われる。

ところが不思議なことに、尊意の将門調伏は、『尊意贈僧正伝』を始めとして叡山の記録にはほとんど残らなかった一方で、『僧綱補任抄出』や『覚禅抄』（「寛信記」を引用）といった、南都・真言寺院の記録の中に見出すことができるのである。ただ、『覚禅抄』所引の「寛信記」によれば、法琳寺泰舜の将門調伏（この内容は『元亨釈書』『泰舜伝』に詳しい）の際、泰舜の太元法の独鈷が折れたが、尊意の不動法の剣もまた折れたのだとして（この部分、『元亨釈書』にはみえない）、尊意は泰舜の引き立て役的に扱われている。

将門の乱逆は、当時国家的大事件であったため、寺院においてはここぞとばかり将門調伏譚を各寺院宣揚のための題材とした。叡山における明達・浄蔵。真言寺院における泰舜。東大寺における綱索

院の執金剛像。醍醐寺における五大堂の本尊。これらの話が、それぞれの立場において、我寺院こそ、また我等が僧こそ將門調伏の立役者であったと喧伝したのである。⁽⁹⁾このような状況の中で、尊意の將門調伏が、たとえ事実であったとしても、叡山の中で忘れ去られていくのは、無理なからぬことであった。このような状況を勘案すると、『平家物語』にいう叡山宣揚の成句「尊意振剣」とは、この成句に関する二つの伝承のうち、菅公靈を鎮慰したとする伝承に関わるものだと考えざるを得ないであろう。叡山において尊意は、あくまでも菅公の怨靈を鎮慰したという認識においてこそ、叡山宣揚の成句に登場し、喧伝されることになり得たのだと考えられるのである。

なお、東大寺宗性による『日本高僧伝要文抄』『弥勒感応抄』には、「尊意伝」が載せられているのにもかかわらず、尊意による醍醐天皇加持の部分が落とされているのも、もしかしたら、南都側の叡山に対する意識が、微妙に反映していたのかもしれない。

二、『僧妙達蘇生注記』にみる尊意

尊意が將門を調伏したとする伝承として興味深いのは、『僧妙達蘇生注記』所載の記事である。黒川本⁽¹⁰⁾には、

下総国居住平將門、一府之政禁断城東悪人之王也、彼禁断之縁則日本州之悪王可_レ被_レ召遣、是前生可_レ治_レ領天王_二者也、而天台座主尊意者、為_二國王師_一、随_二其詔命_一修_二惡法_一、而將門令_レ殺、依_二是罪報_一經_二十一劫_一不可_レ得_二人身_一、故將門與_二尊意者

一日之内十度合戦无_レ間、
とあり、東寺觀智院本『三宝絵詞』中巻末に「或本云」として付載されている「妙達和尚ノ入定シテヨミカヘリタル記」⁽¹¹⁾（以下、觀智院本と略称）には

又下総国ニアリシ平將門ハコレ東国ノアシキ人也トイヘトモ先世ニ功德ヲククリシムクヒニテ天王トナレリ天台座主尊意ハアシキ法ヲ行テ將門ヲコロセリコノ罪ニヨリテ日コトニモ、タヒタ、カヒス

とある。兩本ともに將門には好意的な態度がみられるのに対し、尊意については貶めた物言いになっている。より原本に近いと思われる黒川本は、觀智院本より尊意に対して辛辣な物言いがなされ、また尊意に対してだけではなく、天台の僧についても、

又天台座主等居処者知也ト宣、彼座主等者、受戒者強令_二惱乱_一、依_二其報_一我城死作用石獄入置宣、

とあり、天台座主等が地獄の苦を受けているとして、あまり好意的とは思えない書きぶりとなっている。また、牛頭獄卒二人が妙達を連れて現世に還る場面においても、

現天台山并京化也師之受_レ苦所々令_レ見給、炎魔王宮城辰巳角去三里許雲晴者荷石立也、同城未申角祚源者戴_二三角石_一在也、同城戌亥角去里許談祐者懷_二銅火柱_一居也、同城丑寅角平塞者令_レ荷_二運万里許石_一、同城戌亥角去三里許延寂者戴_二八尺石_一立也、是衆生之施受用而不_レ致_二觀行_一貧食罪、

とある。ここにあげられている僧は、ほとんどその経歴が知られていないが、雲晴は延喜十九年（九一九）権律師になった延曆寺の僧⁽¹²⁾

であり、平塞は淨藏と同じ頃生存していた僧である。⁽¹³⁾ 観智院本の、これに該当する部分では、「日本国ハナノ宮コノ他化師ノナカニ」として、定増・湛祐・平塞・増嶋^(融カ)・延寂・延善が、同じように地獄の責苦を受けていることが語られるが、叡山僧雲晴の名は現われない。

片寄正義氏は、両本を比較し、「漢文の方が遙かに原形に近いものと思われる」として、黒川本の方が原形に近いのではないかと推論されたうえで、黒川本の方は、東国の人々が多く登場することに対し、観智院本には、京周辺か京以西の国々の人物が登場することから、観智院本が黒川本より後の成立とすれば、「都か、都に近い何人かによって適宜人名の取捨・挿入が行われたのではないか」と推測しておられる。⁽¹⁵⁾ また、両本共通の話と黒川本特有の話が、ほとんど関東・東国に限られることから、『妙達蘇生注記』の原文は、「東国の或仏家によって撰述せられたものではないか」と考えておられる。確かに、将門に対する好意的な描き方は、朝敵として各寺社が調伏に明け暮れていた都にいた人物の視点とは異なるものと認めることができらる。また、黒川本には濃厚にみられた反叡山色が、観智院本では、尊意に関する記事を除いてほとんど払拭されていることには、叡山をあまり貶めないという、おそらくは叡山を尊敬の対象として見ていた都人の配慮が働いた結果であるように思われる。

ところで、興味深いことに尊意とともに貶められている人物として、藤原忠平が登場するのである。そして、両本とも妙達から炎魔王に忠平のことを尋ねる形をとっている。

太政大臣藤原忠平在所者知哉ト宣、彼朝臣者、除目之日成⁽¹⁴⁾阿容一依ニ人物多受用之罪報一九頭龍成也、受⁽¹⁴⁾大苦惱一也。(黒川本)

又妙達聖申サク太政大臣藤原忠平ハ何所ニカ生給ヘル是ハ妙達カ檀越ナリト申忠平ハオホク乃人ノ物ヲ除目ニヲサメトリテオホクノふこ^{本ママ}ムルミをソコナヘリオノカ心ニマカセテ罪ヲツクレリ是ニヨリテ頭九アル龍トナレリ (観智院本)

登場人物の多くが地方寺院の僧か一般庶民であり、地方官吏としては国守はみえず介以下しかみえない中において、中央官吏のそれも太政大臣が登場するのは、他の登場人物に比して異質の感がある。

また、両本とも忠平・将門・尊意と三人が連続して登場するのも注意が引かれる。おそらく、その背景として、将門に対立する存在としての時の太政大臣忠平、そして忠平と深く関わっていた尊意、という構図があったものと思われる。将門を決して批判的には扱わない作者の意識の中には、将門に対して将門を滅ぼした悪者としての忠平・尊意、という見方があったのではなかったか。どうも『僧妙達蘇生注記』は、忠平・尊意に対してかなり批判的な目を持っていた人物あるいは集団によって制作されたものであるように思われなければならない。それにしても、この書の成立時期と考えられている天曆九年(九五五)から長久年間(一〇四〇〜四四)の間に、忠平・尊意に対してかなり批判的な人物(集団)が存在したことは注目すべきであろう。

なお、主人公妙達なる僧に関して、尊意の弟子明達と関連があるのではないかと考え、明達の名を借りて創作された説話上の人物ではないかとする見方がある。⁽¹⁶⁾ しかし、前述したように、明達は叡山

においては将門を調伏した立役者の一人であった。「僧妙達蘇生注記」が、将門に対してかなり好意的であることを勘案すれば、主人公として将門を調伏した人物の名を借りるということは考え難いのではない。また、尊意をはじめ叡山僧を貶めて描いている点、叡山僧への批判的な視点を見ることができ、はたしてそのような作者が、主人公の名前として将門を調伏した叡山僧明達の名を借りることがあり得たであろうか。本来ならば、将門を調伏した明達こそ地獄の責苦を受けても不思議はなかったはずである。更に、尊意は明達の師にあたるだけに、もし明達の名を借りたとすれば、炎魔王が弟子に師の墮地獄を語る形をとることに、かなり辛辣な皮肉となってしまうと思われるが、如何なるものであろうか。

いずれにせよ、おそらく原本に近いと思われる黒川本の反叡山的色彩をみると、尊意が将門を調伏したとする伝承は、叡山とはかなり距離のある伝承圏に伝えられていたものと看做さざるを得ないのではないかと思われる。

ところで、忠平とともに貶められている尊意は、実際に忠平と密接な関係を持っていた。そこで次に、忠平・尊意二人の関係が、菅公怨霊説話とどのように関わっているのかをみていこうと思う。

三、菅公怨霊意識の成立について

道真が死後怨霊となって藤原一族に祟ったとする最も早い記事は、『日本紀略』延喜二十三年（九二三）三月二十一日条に見える保明親王薨去の記事である。

三月廿一日乙未。国忌。是日也。依ニ皇太子臥病。大ニ赦天下。子刻。皇太子保明親王薨。年廿一。天下庶人莫不悲泣。其声如雷。举世云。菅帥霊魂宿忿所為也。

保明親王の死について、世上では、菅公の怨霊によるものであるとの専らの噂であったことが記されている。これがもとで、同年四月二十日に道真を右大臣位に復し、正二位が追贈されたうえ、昌泰三年正月二十五日の道真左降の詔書が破棄された。更には、年号も延長と改元されたのであった。保明親王の死が、当時の朝廷に与えた衝撃がどれほど大きいものであったかが推測されるのである。

ところで、角田文衛氏によれば、菅公怨霊譚が世間に広まり、怖れられていくようになった背景には藤原忠平の存在があったとされ、「明示する証拠はなにひとつ遺存していない」とされながらも、忠平は、保明親王や慶頼親王の薨去、時平の子保忠の死、延長八年六月二十六日の清涼殿への落雷を、菅公の怨霊と結びつけ利用することで、政敵を退けていったとされるのである。⁽¹⁷⁾更に、延長八年六月二十六日の清涼殿への落雷に関しては、「この椿事を奇貨とし、それと菅家の怨霊を結びつけ、気の弱い醍醐天皇を死に追いやったのは、天台座主で、忠平の密旨を承けていた尊意であろうと推測される」と述べられるのである。⁽¹⁸⁾

また、『北野天神縁起』における尊意法験説話の意味を探った南里みち子氏も、「道真が大宰府の謫地に没した後、怨霊思想はかつてない高まりを見せたが、忠平一族とその側近の僧侶たちは、この風潮をたくみに利用して、忠平政権の確立につとめたことが知られる」とされ、その側近の僧とは、尊意・浄蔵・日蔵・空也であり、

なかでも尊意はその中心人物であったとされ、基本的には、角田氏論を基盤として、菅公怨霊説話を、極めて政治的事情のもとに成立したものと捉えておられる⁽¹⁹⁾。

しかし、天皇始め当時の社会全体が菅公の怨霊の影に脅える中であつて、一人忠平のみが怨霊を怖れぬ合理主義者であり得たであらうか。平安時代においては、国家的行事として御霊会が行われる等、怨霊を畏怖する気持は、現代の我々の感覚からでは計り知れないものがあるのであるまいか。まして、自らの政治権力確立の為に、藤原氏によって政界から追い落とされた菅原氏である道真の怨霊を利用しようなどということが、はたしてあり得たのであらうか。

そもそも、菅公の怨霊は、いつ頃から人々の間において意識され始めたのだらうか。記録の上では、保明親王の死が初めて菅公の怨霊と結び付けられて噂されたことが知られるのであるが、これは、はたして角田氏の述べられるように、忠平と増命によって意図的に広められた流言であつたのだらうか。保明親王は、角田氏も指摘されるように、当時流行していた咳病が原因で亡くなったものと考えられるが、咳病で亡くなったことが菅公の怨霊と結び付けられて考えられた、ということはなかったであらうか。いったい、當時にあつては、疫病の流行は怨霊の所為と意識されるのが普通ではなかつたか。

保明親王薨去の原因となつた咳病は、正月から京都で流行していたものである。『日本紀略』延長元年正月二十一日条に、

廿一日丙申。召_二祭主大中臣安則_一。仰_下京中咳病往々有_レ聞。仍

為_レ攘_二件災_一。可_レ祈_二諸社_一之由_上。

とあり、更に二十七日には

廿七日壬寅。囁_二名僧十口於紫震殿_一。限_二三箇日_一。臨時御読経。為_レ攘_二咳病_一也。

とあり、朝廷がこの咳病の災を攘うことに腐心していたことが窺われるのであるが、結局この御読経も保明親王にとっては効を奏さなかつたようである。

ところで、これを遡ること八年、延喜十五年(八一五)、六月頃から十月頃にかけて咆瘡が流行した。『日本紀略』によると、六月二十日に大極殿で臨時の御読経が修せられたが、流行は一向に収まる気配がなく、遂に十月十六日には、紫震殿大庭・建礼門・朱雀門の三ヶ所において大祓が行われるに至つた。

十六日癸卯。巳一点。於_二紫震殿大庭・建礼門・朱雀門等三所_一有_二大祓事_一。為_レ除_二咆瘡_一。又依_二仁寿三年・貞觀五年例_一也。又於_二仁寿殿_一囁_二請智徳名僧廿口_一。有_二御読経事_一。戊刻。於_二建礼門前_一有_二鬼気祭事_一。為_レ除_二咆瘡_一也。日来主上不豫。民間咆瘡転発。

また、十月二十六日条には、咆瘡流行のため天下に大赦を行ない、八虐を犯した者を除き死刑囚以下悉く赦している。この咆瘡は猛威を奮つたらしく、翌延喜十六年正月一日の朝賀は「依_二去年咆瘡_一」って停止された。このように、この咆瘡の流行が当時の朝廷に与えた影響は甚だ大きかつたのである。

さて、ここにおいて注目されるのは、この咆瘡流行の際朝廷は、

「仁寿三年、貞觀五年例」に倣って宮中において大祓を行なったことである。

仁寿三年の例とは、『文徳実録』仁寿三年二月条に、

是月。京師及畿外多患_二咆瘡_一。死者甚衆。天平九年及弘仁五年有_二此瘡患_一。今年復不_レ免_二此疫_一而已。

とあり、また三月壬子（二十二日）条に、

壬子。請_二名僧百口_一。於_二大極殿_一。転_二読大般若經_一。限_二三日_一。訖。攘_二災疫_一也。

とあることを指し、当時咆瘡駆除のため、大極殿において、大般若經の転読が行われたことが知られる。

また、貞觀五年の例についてであるが、これは『三代実録』貞觀五年正月二十七日条に、

廿七日庚寅。於_二御在所及建礼門_一。朱雀門_一。修_二大祓事_一。以攘_二災疫_一也。賑_二給京師飢病尤甚者_一。自_二去年冬末_一。至_二于是月_一。京城及畿内畿外。多患_二咳逆_一。死者甚衆矣。

とあることを指している。この時の疫病もなかなかその勢いが衰えなかつたらしく、三月四日条には、勅命によって、七道諸国の名のある神社に幣を分かち、咳病の流行を止めようとしたことが記されている。しかし、どうも効験は捗々しくなかつたようで、遂に、五月二十日に、神泉苑で御霊会が修されるにまで事態は深刻化したのであった。ところで、その五月二十日の御霊会の記事の中に、次の如き文言を見出すことができるのである。

所謂御霊者。崇道天皇。伊豫親王。藤原夫人。〔吉子〕及_二觀察使_一。橘逸〔仲成力〕勢。文室宮田麻呂等是也。並坐_レ事被_レ誅。冤魂成_レ厲。近代以

来。疫病繁発。死亡甚衆。天下以為。此災。御霊之所_レ生也。

つまり、当時流行の疫病は御霊の所為と看做されていたわけである。そうすると、この貞觀五年の疫病の事例を下敷とした延喜十五年の咆瘡の大祓の際においても、当然のこととして、その咆瘡流行の背後に御霊の影が意識されていたはずである。そして、延喜二十三年の京中に流行した咳病についてもまた同様であったらうと考えられるのである。というのは、貞觀五年の例を見ると、御霊の所為であるとされたこの時の疫病とは咳逆に外ならなかつたのである。

延喜十五年の咆瘡流行の時、はたして御霊として菅公の御霊が意識されていたかどうかは定かではない。しかし、延喜二十三年の咳病の流行においては、明らかに菅公の怨霊が意識されていたはずである。世間において、保明親王の死が直ちに菅公の怨霊と結び付けられたことには、以上のような事情があつたのであつた。これは、決して忠平側から意図的に広められた流言といった類のものではない。疫病の流行に際しては、常に怨霊の影に脅えたであろう平安人にとって、延喜二十三年の咳病流行は、容易に菅公の怨霊と結び付いたことであろう。このようなことが、世を挙げて、保明親王の死を菅公の怨霊の所為と噂するということになつたのである。想像になつてしまふが、おそらく延喜十五年の咆瘡流行の際から、ひそかに菅公の怨霊の影が囁かれ始めていたのではなかつたか。延喜二十三年、咳病による皇太子の死という非常にショックな事件によつて、やはり咳病を流行させていた御霊は菅公であつたのだ、という認識を確信することになつたのではなかつたらうか。

時代は下つてしまふが、『今昔物語集』卷二十七第十一話「或所

膳部見善雄大納言靈語」によっても、咳病の流行は怨霊の所為と考えられていたことを窺うことができる。この話は天下に咳病が流行した時、ある膳部の男の許に伴大納言の霊が現われ、死後行疫流行神となっていることを述べ、生前朝廷より蒙った恩に免じて、疾疫流行によって国中の人が死ぬところを咳病に止めていすることを告げる、という内容である。伴大納言は、応天門変によって、事実否認のまま伊豆へ配流され、その地で没するのであるが、応天門変後の政界の動きからして、伴大納言が罪せられた背後には、藤原良房・基経による謀略があった可能性も否定できないのである。『今昔物語集』のこの話は出典未詳話であるため、いつ頃成立した話なのかは明らかでないが、ここには、何らかの政治的怨みを抱いて没していった者が行疫流行神になっていること、咳病もその行疫流行神によって司られていたことが示されている。この話をそのまま菅公の怨霊と咳病の流行にあてはめて考えることは危険であろうとは思いますが、両者には共通する認識が底に流れているように思われてならないのである。

ところで、保明親王が菅公の怨霊によって没してからしばらくして、時平・忠平の妹醍醐天皇女御藤原穩子は臨月を迎える。皇子出産に際して、おそらく天皇と忠平は菅公の怨霊による祟りを最も怖れたであろうことは想像に難くない（流布本『大鏡』「朱雀天皇」の補入記事には「このみかど生れさせたまひては、御格子もまららず、夜昼火をともして、御帳の内にて、三つまでおほしたて奉らせたまひき。北野におち申せたまひて、かくありしぞかし」とある）。そんな中で、穩子は七月二十四日無事寛明親王（後の朱雀天皇）を

出産するのであるが、この時勅命によって加持を行ない、皇子を安産たらしめたのは、外ならぬ尊意であった。『尊意贈僧正伝』によれば、

延長元年六月廿九日、依勅。奉為中宮御産。於右僕射東五條家。七箇日間修不動法。第四日初夜之後。大聖歡喜天出現。異相称名上□。因妓加供聖天。七月廿四日。親王降誕。□心感動。百僚舞踏。醍醐皇帝第十一皇子。諱寛明親王。即依勅旨。以和尚位親王〔任敷〕護持之師也。偏勵身力。奉祈寶祚。

とあって、この加持によって尊意は寛明親王の護持僧となったのである。菅公の怨霊への畏怖が甚しかった当時において、無事親王を誕生させ得たことは、尊意の験力を高く評価させることになったことであろう。

この後、忠平が尊意と深い関わりを持ち、尊意をブレインとして法性寺造営に着手することには、尊意が菅公の怨霊の祟りを押さえ得た、この寛明親王誕生の加持が大きく関わっていたはずである。近年、竹居明男氏によって、忠平と尊意の関係について、忠平が尊意の力を借りて法性寺（特に五大堂）を造営することによって、菅公の怨霊に対処し乗り切っていたのではないか、という見解が⁽²⁰⁾出されているが、忠平が、彼自身と彼の一門の菅公の怨霊への対策として尊意を選んだ理由はここにあったのである。

四、法性寺を中心とした忠平と尊意の関係

竹居氏は、忠平が、尊意をブレインとして、保明親王が菅公の怨

霊に取り殺されたと噂されたあの延長元年から法性寺の造営に取り掛かったこと。わけても怨霊調伏を意図する五大堂を造営していったことを重視され、これらのことは菅公の怨霊に対処するためのものであったのではないかと指摘されている。そして、忠平は菅公の霊に脅えつつも、仏教の力（とりわけ密教）を恃むことによって、実質的に怨霊の祟りを乗り切ったのではなかったかと考察されたのである。

平安時代における怨霊に対する怖れを考慮した場合、おそらく竹居氏の論は正鵠を射ているのではないかと思われる。『九条右丞相遺誠』⁽²¹⁾の中にみえる、

貞信公語云、延長八年六月廿六日、霹靂清涼殿之時、待臣失色、吾心中帰依三宝、殊無所懼、大納言清貫、右中弁希世、尋常不敬仏法、此兩人已当其妖。

という言も、仏教の力によって無事菅公の怨霊の祟りを乗り切ることのできた忠平晩年の偽らざる述懐ではなかったらうか。

忠平と法性寺との関係は竹居氏論文に詳しいが、忠平は延長二（四年）にかけて、度々法性寺に参詣あるいは宿泊し、その後も五十賀・六十賀・七十賀を法性寺で行なっている。死後も、法性寺の東北の地に埋葬され、子の師輔によって仏経供養が営まれ、七々日の法要も法性寺で行われている。このように、忠平は生涯を通じて深く法性寺と関わっていた。

『貞信公記』によると、法性寺には、延長三年三月八日に五大尊が造られ、また同年八月十日にも新たに五大尊が造られたことがみえ、法性寺が怨霊調伏を意図した寺であったことがおおよそ察せら

れるのである。そして、その後も、法性寺は藤氏九条家守護の寺として、九条家と深く関わっていくことになるのである。⁽²²⁾

五、「もの」に対処し得た忠平の伝承

さて、忠平は法性寺に五大堂を造営することによって、菅公の怨霊に対処し得た人物であったことが推測されるのであるが、『大鏡』の忠平伝をみていくと、また興味深い記事に出会うのである。

そもそも、『大鏡』においては、栄華を極めた道長に至る藤氏繁栄の基は忠平にあったとする意識が色濃く窺え、道長につながる藤氏撰関体制の確立は、朱雀天皇の撰政関白であった忠平に始まるのだとしている。『大鏡』では、現在の藤氏繁栄の基を築いた忠平を賞揚するために、語り手である二人の翁のうち、夏山繁樹には、貞信公の小舎人童であり、繁樹なる名も貞信公の命名によるものであるという設定がなされ、繁樹は貞信公に仕えたことを頻りに強調し、貞信公の名が出るたびに「わが宝の君」と誇らしげな顔をするのである。大宅世継が年代記的に皇統や藤氏の流れを語るのに対して、夏山繁樹には藤氏の繁栄を強調する役割が与えられているのも、『大鏡』作者が、貞信公が将来の藤氏の繁栄を見通し、その繁栄を見届ける者として、夏山繁樹という夏山に繁茂する樹木のように繁栄した藤原氏を象徴的に示す名をつけた、という設定をしているのではないかと想像してしまうのである。

このように、『大鏡』の中には特別な存在である忠平の伝をみていくと、忠平の邸の中に宗像明神が祀られており、後世道長

が、先祖の持ち物は皆ほしいものだが、貞信公の屋敷だけは平常でも神の祟りがありそうで気が許せず、怖ろしい感じがして遠慮したい旨を述べたことを伝えている。若い頃、夜の内裏における肝試しでびくともしなかつた道長が、邸内に祀られていた宗像明神を怖れたのである。その宗像明神も忠平にはうつつに物を言い、それも、忠平が自分より身分が高いことがつらいと訴え、気の毒に思った忠平が朝廷に奏請して位を上げてやったとして、宗像明神と対等に対応した人物として忠平の超人的な面を伝えている。

ところで、『大鏡詳解』は、この記事に関して『三代実録』貞観元年二月三十日条に「太政大臣東一条第^(良房)の明神に正二位が授けられた記事がみえることから、忠仁公(良房)と貞信公を誤ったものだろうか、と述べており、『大鏡新講』『大鏡評釈』もこの『詳解』の見解を踏まえ、良房と忠平を混同したものであろうとしている。しかし、実はこれは、宗像明神と対等に対応し得、むしろ神より優位に立ち得たという忠平像を造形するための、『大鏡』における改変ではなかったか。この忠平と宗像明神に関する説話が、他の説話集等に全く見えないことも、『大鏡』のみにおける意図的な改変であったことを思わせるのである。

『大鏡』では、この記事に続けて、忠平が南殿の鬼を退散させた話を記している。

いつの帝の頃か定かではないが、忠平が勅宣を受け、陣の座に行こうと紫雲殿の御帳台の後ろを通った時、ものけのけの気配がして、大刀の石突が毛むくじらの手で捕えられる。忠平は内心、鬼に違いないと思うものの、臆した様子を見せまいと心中に念じて、「お

はやけの勅宣うけたまはりて定めにまいる人とらふるは、なにものぞ。ゆるさずば、あしかりなむ」と叱責し、大刀を抜いてその手を捕えたところ、鬼は忠平の手をふりほどいて退散したという。

ここには、鬼に対しても臆することなく、物事の理非を説き、鬼を退散させた忠平の姿が描かれている。忠平は、鬼に対して怖れは抱くものの、毅然とした態度で対処し、鬼に対して優位に立ち得た人物として造形されているとみてよいだろう。この話は、基本的には、宗像明神と現実に対話をした忠平像に通ずるものである。

『大鏡』においては、神あるいは鬼という霊的世界の「もの」も忠平に対しては敬意を表した、ということをとって強調しようとしているように思われる。

ところで、『源氏物語』「夕顔」巻の中に、忠平の南殿の鬼退散の伝承を取り込んでいると思われる箇所がある。

源氏が夕顔を連れ出し、某の廃院で一夜を過ごした時、霊が現われ夕顔を取り殺してしまう。霊の出現に源氏は生きた心地もせず、ようやくのこと紙燭を持って来させ、傍らの夕顔はと見れば、既に息絶え、だんだんと冷たくなっていく。右近は泣いて取り乱し、その様を見て源氏は、自分自身も怖ろしくはあるもののように、
「南殿の鬼のながしの大官おびやかしかるたとえ思し出でて」
気を取り直し、右近をたしなめるのである。

この部分は、『大鏡』にみえる忠平と南殿の鬼の話を下敷にしていると見られており、もしそうだとすると、忠平が南殿の鬼を退散させたという話は、忠平が没した天曆三年(九四九)から一〇〇〇年初頭にかけて、貴族社会において、かなり知られた逸話であった

ことが窺われるのである。

これは想像になってしまふのであるが、忠平が南殿の鬼を退散させたという話は、おそらく忠平自身かあるいは忠平周辺から喧伝されていった話ではなかったろうか。菅公の怨霊に対して、現実的には五大堂造営という対策を構じた忠平は、自らの周辺から、霊的な世界に充分対処し得る人間としての忠平像を喧伝していったのではなかったかと思われるのである。少なくとも『大鏡』において忠平は、神と対等であり得た人物として造形されており、このような忠平像は、師輔以降藤原氏の中心となつていった九条家の中において、長く伝承されていった話ではなかったかと思われるのである。

また、九条家の中において、忠平は仏教の呪法の世界に通じていた人物としても伝承されていたらしく、『愚管抄』の中に、

貞信公ノ御事ハ、イカニモノタミウチアル人ニハオハセズ。
将門ガ謀反ノ時、禁中ニ仁王会アリケル。コトヲコナヒ給ケル
ニ、コエバカリニテヲコナヒ結テ、身ハ人ニミエ給ハザリケ
リ。隠形ノ法ナド成就シタル人ハ、カクヤト覚ケルハ、タシカ
ニイヒツタエタルコト也。

とあつて、隠形の法を身に付け、真言に通じていた人物であつたかの如くいわれている。このことと『大鏡』の忠平伝とを併せ考えると、九条家においては、忠平は超人的人物としてあがめられる存在であつたらしいことが知られるのである。

なお、『北野天神縁起』建久本には、忠平と師輔に関して、忠平は道真の太宰府配流中、常に連絡を取っていたこと、師輔が天徳三年に北野社の屋社を増築し、宝物を奉納したこととその祭文を載せ

るなど、九条家の人間と天神との関わりを強調し、それがために撰録の家は天神によって守護されているのだとしている。このことは、『愚管抄』にみえる、忠平は時平に同心しなかつたということ、天神は観音の化身となつて撰録家を守護する存在である、という発想と同一のものであるように考えられる。源豊宗氏が指摘されるように、『北野天神縁起』と『愚管抄』は、その成立基盤が非常に近かつたことを思わせるのである。

六、北野天神縁起

における尊意法験説話の意味

さて、藤氏九条家において、忠平は神格化されて伝承されていたことは前述したが、そのことと関連して、忠平が怨霊対策として造営し、それによつて藤氏の繁栄を宗教的側面から支えた法性寺は、藤氏九条家の中において重要な寺院として長く存在し続けたこととなつた。このことは同時に、その寺の名称にまでなつた尊意の存在もまた、九条家の中において特別な僧として長く記憶に止められていくことになつたのではあるまいか。

源豊宗氏は、『北野天神縁起』と『愚管抄』との共通性を指摘され、『北野天神縁起』の制作には慈円が関与していたのではないかとされている。もし九条家の出である慈円が関与していたとするならば、忠平と密接な関係を持ち、なおかつ、菅公の怨霊対策としての法性寺造営において中心的な存在であつた尊意は、菅公怨霊説話を語る際、慈円にとってはすぐに連想し得る人物であつたであろうこ

とは充分想像され得ることである。

また、叡山においては、尊意が不動法によって菅公の霊を鎮め、醍醐天皇を安穩たらしめたという話は、『尊意贈僧正伝』以来叡山では周知の話であったとみてよいだろう（『扶桑略記』にこの話がとられているのも、叡山内において知られていた話であったからだろう）。

そうすると、九条家の出であり、天台座主にもなった慈円が、菅公怨霊説話に関して、すぐに尊意を連想することは、あたりまえのことではなかったか。

九条家においては、法性寺の五大堂によって、菅公の怨霊を押さえ得た。また、叡山においては、延長八年六月の醍醐天皇加持によって叡山の験力を誇示することになった。そして、その両方において中心的役割を果たした尊意こそ、菅公の怨霊を鎮め得る唯一の人物として両者においてそれぞれ記憶されていたはずなのである。九条家・叡山においては、菅公怨霊説話を語る際に、尊意は絶対に外すことのできない人物だったのである。

ただし、縁起の建久本にみられるように、天神は師輔によって摂関家を守護する存在という位置付が与えられており、おそらく九条家の中では天神はそのような存在だと考えられていた。また、天神の縁起という性格を考えた場合、天神を貶めて描くことは許されない。そこで、実際の尊意による菅公の霊鎮慰を、柘榴による火災と灑水印による鎮火という対決に置き換えて描くことによって、象徴的に二人の力関係を示したのではなかったか。

菅公怨霊説話の冒頭に菅公の霊を押さえ得る唯一の人物としての

尊意を強調して描くことは、叡山宣揚の意図があると同時に、その尊意が深く関わっていた忠平とその一門の、菅公の霊からの絶対的な安泰性というものも暗にその背後に潜ませていたのではなかったかと思う。

なお『阿婆縛抄』「名所事」に、

法性房

菅丞相ノシリカケ給ヘル石有レ之語伝タリ。而崇モセデ今ハ何所ニ有トタニ不レ知之。遺恨ノ事也。

とあり、同書「諸寺縁起下」「法性房」にも同一の記事がみえる。これがどのような伝承の残片であるのか窺う由もないが、法性房に菅公が来て尊意と対面したとする何らかの説話がその背景にあるのだらうと思われ、もしかしたら柘榴天神の話が創作されていく何らかの下地になったものかもしれない。

おわりに

いずれにせよ、『北野天神縁起』における柘榴天神の話は、夾雜的要素ではなかった。縁起の制作に慈円が関与していたとするならば、九条家・叡山にとって極めて重要な話であったことになるのではないか。そして、柘榴天神の話が創作されるにあたっては、九条家における忠平と尊意に関わる伝承と、叡山宣揚の成句「尊意振剣」にみられる、尊意が不動法によって醍醐天皇を安穩たらしめた話⁽²⁴⁾が、その下敷になっていたのであらうと思われる。別稿でも触れたが、『北野天神縁起』弘安本の柘榴天神の場面には、尊意と菅公が

対面する脇に不動明王の絵図が下げられ、壇が築かれている様子が描かれているのも、尊意が不動法によって菅公の霊を鎮め得たという伝承に基づいてのものであろう。

最後に『歓喜天縁起』⁽²⁵⁾について少し触れておこうと思う。この絵巻については、秋山光夫氏、宮次男氏⁽²⁶⁾によって詳細な研究がなされている。この絵巻における尊意関係説話としては、『北野天神縁起』にみえる柘榴天神の話、宮中に召された尊意が聖天の加力によって洪水の鴨川の水を去らせたこと、宮中において熾盛光法を修する脇壇に歓喜天の像を立て、菅公の怨霊を鎮めたこと、将門の乱の時宣旨を蒙って不動安鎮国家法を修し、その時も歓喜天を脇壇に立て将門を誅したことが描かれている。

この絵巻の成立は一二〇〇年代後期（一二〇〇年末期までは下らぬとのこと）ということである。ここでは、軍記にみられる「尊意振剣」にまつわる二つの伝承の内容が描かれていることになる。おそらく『北野天神縁起』の制作圏と南都・真言寺院に伝承されていた尊意による将門調伏譚とが会合することによって制作されていたものと考えられ、このことは、一二〇〇年代後半には「尊意振剣」にまつわる二つの伝承が混同していたことを示すものであろう。また、軍記の世界において「尊意振剣」という成句に二つの伝承が生じていくことと軌を一にしているのであろうと思われる。

注

- (1) 笠井昌昭氏『天神縁起の歴史』（雄山閣・昭和48年）
 (2) 南里みち子氏「菅公怨霊説話成立の背景」（『国語と国文学』昭和60

年7月）

- (3) 注(1)
 (4) 拙稿「尊意振剣」小考」（『並木の里』三十号、昭和63年6月）
 (5) 今成元昭氏「惠亮破脳・尊意振剣」の成句をめぐって（二）」（『立正大学人文科学研究所年報』21号、昭和59年3月）に詳しい。
 (6) 大日本古記録『貞信公記』（岩波書店）
 (7) 平林盛得・小池一行氏編『五十首引僧綱補任僧歴綜覧』（笠間書院、昭和51年）
 (8) 拙稿「尊意振剣」小考補遺―尊意の将門調伏譚をめぐって―」（『並木の里』三十一号、平成元年5月）
 (9) 『扶桑略記』天慶三年二月二十四日条。なお、東大寺・醍醐寺の仏像にまつわる将門調伏譚は、それぞれ『東大寺要録』『醍醐寺縁起』に載せられている。
 (10) 続々群書類聚16
 (11) 『諸本対照三宝絵詞』（笠間書院、昭和54年）
 (12) 『僧妙達蘇生注記』の登場人物については竹居明男氏「覚書」「僧妙達蘇生注記」の基礎的考察」（『国書逸文研究』14号、昭和59年12月）に詳細な調査がなされている。
 (13) 『日本紀略』延喜十九年十二月二十一日条。
 (14) 『元亨釈書』『浄蔵伝』
 (15) 片寄正義氏『今昔物語集の研究下』（藝文舎、昭和49年）
 (16) 小林芳規氏「三宝絵の妙達和尚―国語音韻史からの一話題」（『武蔵野文学』32、昭和59年11月）
 (17) 竹居明男氏「覚書」「僧妙達蘇生注記」の基礎的考察・補説」（『国書逸文研究』18号、昭和61年12月）
 (18) 角田文衛氏「菅家の怨霊」（角田文衛著作集5『平安人物志上』所収、法蔵館、昭和59年）
 (19) 角田文衛氏「菅原道真と北野神社」（『王朝史の軌跡』所収、学燈社、昭和58年）

- (19) 注(2)
- (20) 竹居明男氏「怨霊の幻影―五大堂と撰関家藤原氏―」(『日本思想史学』19、昭和62年9月)
- (21) 日本思想大系8『古代政治社会思想』(岩波書店、昭和54年)
- (22) 福山敏男氏『寺院建築の研究下』(中央公論美術出版、昭和58年)にその過程が詳しく触れられている。
- (23) 源豊宗氏「北野天神縁起絵巻について」(新修日本絵巻物全集第9巻『北野天神縁起』所収、角川書店、昭和52年)
- (24) 注(4)
- (25) 秋山光夫氏「歓喜天靈験絵巻に就いて」(武藤家本天神縁起改題考)、『日本美術論攷』所収、第一書房、昭和18年)
- (26) 宮次男氏「歓喜天靈験記私考」(『美術研究』305、昭和38年10月)